

# とある提督の決断

とうや

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

艦これ始めてネタ的に面白そうなのでちよびちよびと書いてみた。

時代背景は現代日本で艦これサービス開始時期が深海凄艦&艦娘の出現時期としてみます。

注意：

このSSには以下の要素が含まれます。

- ・ 独自解釈&独自設定
- ・ 色々とクロスオーバー要素を混ぜる予定です。
- ・ ア艦これ要素

- ・ハーレム（ただし、別の提督もそうなので主人公だけが、と言うわけじゃない）
- ・続くかどうかは気分次第

# 目次

01	提督が鎮守府に着任されました！	1
02	任務概要を説明しよう	16
03	奇襲強襲は常套手段	28

## 01 : 提督が鎮守府に着任されました!

メガフロート、要するに、人工物のデカイ浮遊物。

相当な資材を必要とするが、その反面作りはそれほど難しいものではなく、基礎だけならばその規模に反して比較的安価に建造可能。

それを利用して海洋に前線基地とし、更に造船工廠など様々な設備を設営して立派な鎮守府を作り上げる計画が進行中らしい。

このメガフロートは、かつて90年代辺りにも浮上した事があったが、当時の土建屋やら各方面に顔の効く政治家の国益を軽視したやり取りの末。

お見事なまでに白紙にされたアイデアだ。

そんな計画が、利権云々を言ってる場合じゃなくなつた2013年10月に日本の国防計画として再度浮上した。

理由は単純だ、深海凄艦といういわゆる『悪霊』にでも分類されるらしい『軍艦』が世界各地の海洋で突如発生。

これが、2013年5月。

瞬く間に人類VS深海凄艦の構図が出来上がり、海洋国家のうち軍事力、防衛能力の

低い幾つもの国がこれらに『喰われた』。

戦慄する間もなく、当時正体不明のナニカであった深海凄艦が次々と人類に襲い掛かる。

当然、反撃は行われたが、海洋に出現する敵（全長1メートル未満）に対して各国の軍艦ではサイズ差の都合からそもそも攻撃が当たらない。

逆に向こうからすれば大きなので当て放題の構図だ。

では、兵士による白兵戦だ！と銃火器やロケットランチャーを装備して挑む者も居たが、ロケットランチャーレベルならば効果があつたものの、殆どのアサルトライフル程度の携行装備は意味を成さず、まさに豆鉄砲。

更に、向こうの攻撃は見た目が小粒な銃撃かと思えば、威力が5インチ砲と同レベルであり、合金や強化プラスチックの盾で防ごうとした兵士は、或いは塹壕でやり過ぎようとした兵士も一様に砲撃で殺されていった。

ちなみに、この間1週間のハイスピード進撃である。

戦線が深刻化する中、更なる悪い報告が舞い込んだ。

敵性体の中に指揮官に相当すると思われる女性型の化け物を発見。

圧倒的火力にて重巡洋艦が会戦まもなく轟沈。

乗組員の救助もままならないまま次々と艦隊が撃沈され、脚の早い駆逐艦一隻だけが

ほうほうの体で帰還した、と。

更に悪いニュースは続くもので、敵指揮官と思われる女性体が複数種類存在を確認され、その内に幾つかが、謎の飛行物体を役使し、航空機を撃墜する事態が発生した。

更に更に、敵生態に侵略され滅んでしまった地域は敵の巣となり、生き残りの生存は絶望的だというのが某国のスパイ衛星からの監視で判明した。

そして、巣となった地点を橋頭堡に、数を増やして別の地域への侵攻を陸海同時に行っている事がわかった。

この頃、普段は腰の重い日本、流石に危機には敏感になったのか自衛隊と在日米軍が防衛線を構築し、なんとか防衛を行っていたが、かなり分が悪くジリ貧の戦いを強いられていた。

在日米軍においては本国への旗艦希望者も多かったが、それ以上に『下手に動いて海洋のど真ん中で完全包围されてなぶり殺しにされる』という分かりやすいビジョンを本の数日前に厨国と北朝鮮がこの混乱を利用して日本に侵攻しようとした際にやらかしたのを見てよく理解している。

中国は装備だけは立派になっても、練度が圧倒的に悪かったせいであつという間に囲まれ、艦も船員も海の藻屑どころか、敵性体の餌にしかならなかったのだ。

そして、何時の頃からか遠距離の通信が通じなくなつた。

詰まり、日本……どころか世界各国が互いの情報のやり取りが出来なくなつたのだ。

そんな危機感に晒され、誰もが焦燥に駆られていた時期に、とある報告が舞い込んだ。

「海で化け物とかわいゝ女の子が戦つてる」

「化け物側の女の子とまともに遣り合つてる女の子たちがいる」

「てか、あれ小学生ぐらいの子もいないか？」

「あ、あの傘持つてる美人の子、なんかすつごゝいの背負つてんだけど。しかも、敵の指揮官一撃で沈んでね？」

等などである。

寝耳に水の事態であるが、味方かも知れない、と言うのはジリ貧の防衛戦闘に参加していた者達にとってまさに地獄に仏。

そんな彼女たちの目的地は、なんと日本だった。

正式には『大日本帝国』だと言つた。

意思疎通が出来たのも驚きだが、それ以上に発言が問題だった。

当初、聞き間違えかと思つた兵士たちだが、彼女たちの言動で段々と一部のネジがぶつ飛んでるオタク自衛隊員を中心に理解が進んだ。

彼女たちの言と、一部のオタク自衛隊の意見を合わせると以下の見解が出てきた。

・彼女たちは旧日本帝国海軍の艦艇が擬人化したもの。或いは九十九神的な何か。



・敵もまた艦艇の何かである可能性があり、あつちは悪霊みたいなもの。

・取り敢えず、彼女たちは味方だが、在日米軍の兵士たちにはかなり喧嘩腰……歴史を鑑みれば仕方ないものと思われる。

と言うものだった。

何でうら若い女性の姿形ばかりなのか、と言う疑問もあつたが本人達もわからないと答えた。

何はともあれ、彼女達、通称『艦娘(かんむす)』はあつという間に日本国民に認知された。

そのお陰か、ご時勢もあつてか自衛隊改め、日本軍が再編された。

これに関しては国防に大きく貢献する艦娘達の意思を汲んだ形となる。

勿論、在日米軍も良い顔をしなかつたが、それでも彼女たちの有用さを考えると押し黙るしかなかった。

彼らとて、妙な意地を張って死ぬ気は無いのだ、当然の選択だろう。

次に、軍事関係の雇用が増えた。

これは特に増えたのが陸軍兵士だ。

希望者の大半は海軍であつたが、その殆どが不純であり、また、上陸戦を見据えるとどれだけ陸軍兵士が居ても不安は多い。

次に増えたのが軍需産業関係者の雇用だ。

先ず、艦娘専用の堅牢な高速輸送艇の再設計、大改修が急がれた。

何故か、と問えば理由は簡単だ。

彼女たちは大分小さくなっていく上にだいたい形も変わっているが自身の名前と同じ艦艇がモデルの艦装を装備している。

駆逐艦達ですら曲がり角で背負う艦装がぶつかる事があるので、通路にそれなり以上の広さが必要となった。

更に、戦艦級ともなれば横幅がひどい事になる。

主に超ド級戦艦の扶桑型等が良い例だ。

扶桑が普通の扉を潜ろうとすると、先ず偽装が引つかかって通れない。

その為、大型のスライドドア、若しくはシャッター式で、と言うのが最終判断だそう  
な。

同様の事態は重巡洋艦でも発生しているので、強ち笑えない話でもある。

彼女たちは軽々と背負ったり持ち上げているが、言うまでも無く彼女たちの装備は非常に重い。

そんなのとぶつかれば、大事故だ。

実際、何人かの人間、また艦娘同士での事故で艦装のドッグ入り、本人は入院、と言

うのもあるそうなの。

そういうや、以前暇潰しでWW2時代の戦史を少し齧った時に、味方との衝突による轟沈や、謎の爆発で轟沈したという不慮の事故もあったそうなの。

日本の看板戦艦の一つもそれで沈んだと言うのだから、本当に「慢心、油断、ダメ。ゼツタイ。」というわけだ。

グダグダと思考が脇にそれてるな。

まあ、とにかく日本は艦娘を主戦力に軍備再編を行い、状況に対応すべく動き出したのだ。

で、各言う俺だが元はただのしがない派遣の技術職で28歳の独身男だ。

日本が戦争状態に陥った事で経済と言うか雇用状況がかなり変わって、派遣職は一部を除いて大抵が雇用元からばっさり切り切られた。

さもあらん事だ。

で、どうしたものかと悩んでいると軍の再編に伴い、兵士及び士官の候補生の募集がかかった。

当然、俺は士官候補生として応募するも、採用がかかったのは陸軍の兵士コースだ。

そこでみっちり2ヶ月ほど訓練所によるブートキャンプ実習及び演習の促成栽培

コースを受け、更にこの期間に採用された陸軍の新兵器の稼動試験を行った。

ペーパーの素人がこれの稼動試験をやる理由はいたって単純。

俺の経歴（様々な機器の評価試験をやった経歴がある）を見て丁度良いとおもったらしい。

後、素人と玄人、両方がどの程度新兵器を扱えるものなのかの検証も込みのようだった。

そういえば、パワードスーツとかそう呼ばれるものの類で近年はこういうのを主題にしたアニメもあったな。

そのパワードスーツの出来栄は正直に言えば、扱いが非常に面倒なものだ。

だが、ゲームやアニメで散々設計された事があるそれは、そういうのが好きなメカオタクやロボオタク等の本物の技術者を集めて比較的短期間で作成された代物なのだ。

敵性体、深海凄艦に対抗するには不恰好でも良いから既存の兵士よりも強く、早く、重火力を奮える必要があったのだ。

それこそ、今まで一般人だった人間に使わせて、そこそこ使える程度の新兵器が。

まあ、実際は適正のある人間がなんとか使えるレベルで、後は本気で訓練積みまくらねば丸で実用できる気がしないとやう残念兵器だった訳だが。

それでも、無いよりは大分増し、と言う判断の元、このパワードスーツは更なる改良

発展を要求された。

それを南西諸島の開放を掲げて防衛戦力を確保しつつ、カチコミを仕掛けたのが7月半ばだ。

俺も当時に陸軍少尉（新兵器は色々と箔付けの意味も込めて装着者の階級は尉官以上に上げられた）として戦場に立った。

戦力の3割に打撃を受けたものの、海軍長官（見た目二十代後半のチョイワル風味）の確な指揮と陸軍長官（ムキムキのジー様）のお見事なまでの前線指揮で危なげなく勝利を拾った。

これにより、ある程度の資材回収拠点を獲たものの、その土地に既に『ヒト』は残っていないかった。

残っていたのは……まあ、有体に言えばゾンビもどきだ。

深海凄艦の駆逐艦級が死体に取り付き、それを素体にして戦力として操ると言う敵しか居ない状態だ。

しかし、陸上であったからか動きは悪く勝利を得るのはそう難しい話ではなかった。

まあ、この位出来なければあのブートキャンプを二ヶ月じゃ卒業できないしな。

そんな感じで南西諸島の開放作戦より帰還すると、何故か人事に呼び出され、異動命令が下される。

そう、海軍の提督になれ、と言う異動命令。

階級は驚きの特進で少佐に上げられた。

そのせいで佐官教育を受ける必要があるという事で俺の夏はそこで潰えた。

おのれ、コミケの企業ブース、覗きに行きたかったのに……弾幕シューティングのところ、覗きに行きたかったのに……。

まあ、それはさておき提督である。

現代、というか艦娘が海戦の主力戦力となった今の鎮守府は非常に提督に溢れ過ぎていた。

というのも、こう言っては何だが、艦娘が多過ぎたのが原因だ。

しかも、同系艦ではなく、まったくの同一艦。

同一人物が何人もいるのだ。

駆逐艦級の艦娘が「一匹見たら……」のレベルで増えた。

どういう事かと指令本部が艦娘に問うところ帰ってきたそうさ。

「私達帝国海軍艦艇は多くの無念を抱えて散りました。その中でも一番大きいのは国を護りきれずに朽ちるという無念です。そして、その無念を抱えつつも再び護国の為に戦いたいという想い、そして人々が私達を求めてくれるのなら、幾らでも私達は現れるのです」

という話だとか？

正直、だからどうして同じのが何人も現れるのか欠片も理解できないが、彼女たちは取り敢えず日本を護りたいから現れるらしい。

まあ、害はないから良いか、と言うのが俺の感想だ。

さて、好い加減に現実目に向けよう。

「幾らなんでもこれは少し酷いんでは？」

「何分、上の方でもかなり急がせてしまったようで、設備は文字通り最小限な様です」

隣に立つ、本土や出征した艦娘たちとの連絡通信やその制御を一手に引き受ける彼女は、今回道案内を兼ねて俺と一緒に本土から来た通信兵だ。

改修型高速輸送艦（艦娘ではなく、普通の艦艇だ）に乗って辿り着いたメガフロート。そこはただだっ広く、多少の航行能力を持つ浮島（メガフロート）に、最小限も最小限、といえる規模の設備群。

後、一部に植林等が施されているのか、割と広めの公園のような一角も存在する。

しかし、それ以外には特に目に付くものが全く存在しない、というか……これで鎮守府運営できるの？というレベルだ。

一応、建造能力なども持たせているらしいので、ここから艦以外にも浮島の設備の必要なものも作る事が出来るらしい。

電力に関しては太陽光、風力、原子力と様々扱っているらしい……細かい所は、後でキツチリ調べよう、怖いし。

いや、新米提督の少佐にこれだけの設備を与える方が破格過ぎるんだけど……ああ、ダメだ、訳分からん。

そんな風に思い悩んでいると、小屋の中から一人の少女が出てきた。

背の小さなセーラー服の少女だ。

髪形はツーテールで何処と無く愛らしい少女の様にしか見えないが……だが、彼女は艦娘だ。

そう思っていると、案内役が前に出て口を開く。

「あなたが秘書艦の特型駆逐艦、漣ですね？」

「はい。特型駆逐艦、漣です！」

「提督が鎮守府に着任いたしました。これより艦隊を指揮します」

「はい、りようかいしましたー！」

「では、提督……現在、提督の指揮下にある艦は漣だけです、ですが提督が真に護国の為に戦う兵（つわもの）足るのならば自然と艦娘たちは集まるでしょう」

え、いやちよつと待とうよ。

幾ら元陸軍所属だからって、これじゃあいくら何でもやりようが無くね？



いや、今更ごねても仕方ない。

というか、軍人になったからには上位命令に容易く逆らうわけにもいかねーよな。

「……了解した。……漣、今後貴官には苦勞をかけるが宜しく頼むぞ」

「わかりました、ごしゅじんさま!」

「ご、ご主人、様……?」

いきなりこの子は何を言っているの?!

「漣、貴女はいきなり何を言っているの?!」

「あれ?嬉しくない??おかしいなあ、本土に居た時、佐官候補生のお姉さんがこう呼べば男の人は喜ぶって言ったのに」

「……いや、まあビックリしたが構わない。好きに呼ぶと良い」

「提督、本気ですか?」

非常に胡乱気な目で見られるが、正直もう大分毒気というか氣力をそがれた。

どうでも良い。

「……さあな。マルレ、本部への無事着任の報告、頼むぞ。俺は道中で受け取った任務をこなすでしょう」

「わかりました。お任せください」

「漣、早速だが色々やるぞ」

「はい、漣にお任せください！」

こうして、俺の提督生活が始まった。

さて、それじゃあ先ずは『建造』だな……。

建造の方法は実にシンプルで、古めかしいコンソールに四種の資材、燃料、弾薬、鉄鋼、ボーキサイトを30〜999の量投入すれば良いだけだ。

ちなみに、単位はkgらしい。

ALL30指定しても120kgなので、用意するのは大変なんだろうな、とも思ったが、そんな事は無かった。

四人？の幼児位の何かが資材庫の方から電気カートでパーツと資材每やってきて、其々が工具を持って勝手に作業を始めたのだ。

「……漣、あれは、なんだ？」

「あれは妖精さんですよー」

一瞬、聞きなれないけど知っている単語が聞こえた。

「……すまん、なんだって？」

「だから、妖精さんですよ！私達艦娘の偽装の製作を行ってくれる工廠の妖精です。他にも鎮守府の整備を行ってくれる各種妖精が居ますよ」

「……そうか」

世界の常識は、何時からこんなファンタジー寄りになったんだ!!

「私達の艦装の中でも働いてるんですよー。かつての船員の代わりはみんな妖精さんがやってくれてるんです」

「そう……なのか」

戦争は変わったな。

いや、戦争は深海凄艦相手のものしか知らんのだけど、なんとというか、なあ。

「今は鎮守府の中なんで外してますけどー、つけたら見ます?」

「そうだな、その時に確認しよう。……さて、すまないが俺は一旦執務室に戻って部屋の片づけをする。漣は今建造している艦が完成次第、艦娘を連れて執務室に来るように。それまでは待機時間だ」

「はーい、ご主人様。それでは、失礼しますねー」

「ああ、行って良いぞ」

可愛い笑顔でそう言うってどこかへと去っていった。

「多分、ここで一番大事なものはスルー検定一級程度の實力なんだろうな。主に、今までの常識をスルーできる様にならんといけなそうだ」

さらば、常識。

こんには非常識。

## 02：任務概要を説明しよう

着任してから既に3時間。

ある程度落ち着いてきた所で、本日の任務の内容説明を漣と、建造されたばかりの『雷』に行っていた。

そう、先ほどの建造で作られたのは『ダメ提督量産装置』と名高い『雷』だった。

一見すると元気の良い少女にしか見えないのだが、彼女で身を持ち崩す……ロリコンに覚醒し、その上に彼女に母性を見出しマザコン？になる提督が続出したのだ。

……男女問わずに。

実に恐ろしい話だが、まあ、所詮噂は噂だ。

気にするほどでもあるまい。

「任務概要を説明する。本案件は、発案者は私となる。内容は当鎮守府正面近海の近海警備を主とした安全の維持と貴艦らの航行の実践演習を兼ねた任務だ。鎮守府正面近海は比較的安全とは言え、それでも敵、深海棲艦の駆逐艦級が出現する領域でもある。油断をすれば、海の藻屑となりかねんが、その程度の事は十分承知しよう。単艦で無謀な突撃でもしない限り、そこまで気を張って挑む任務でもないのも確かだ」

そこまで言った後部屋の明かりを消し、プロジェクトで海図を表示する。

「問う鎮守府の正面海域をある程度進んだ後、二つの航路の内いずれかを進んでもらう事になるだろう。北東は敵主力が居ないとされるだが、はぐれた深海棲艦の艦隊が出現する事があるとされている。逆に敵主力のいるとされる南東の航路は、別の戦場となる海域への航路にもなっており、敵が来るとすればこちらからだ。こちらからは軽巡洋艦級の敵も来る事があるから油断は出来ない」

言いながらPCを操作してスライドを変えていく。

北東は「はぐれ」と書いたデフォルメ駆逐艦深海棲艦の絵。

南東は「主力」と書かれた深海棲艦の群れの絵だ。

「任務は正面海域の警戒でも十分だが、余力があれば北東、或いは南東のどちらかへと進出するのが望ましいだろう。だが、現状必要なのは最低限の安全確保だ」

投影されている映像の中で、正面海域の辺りを赤丸で囲った後、『ここだけで大丈夫！』と赤文字が表示される。

「諸君がその実力を遺憾なく発揮するのならば敵わない、と言うことは無いだろう。本案件は別段急ぐものでもない、寧ろここで功を焦って負傷を負う方が鎮守府として致命傷になりかねん。中破判定となった場合は敵を追わず、必ず帰還しろ。必ずだ」

俺はそこまで言い切ると質問はあるか、と問いかける。

「ご主人様。中破でも夜戦すれば勝てそうな場合なんかはどうしますか？」

「夜戦はなしだ。諸君の本領がそこにあつたとしても、余剰戦力が存在しない今、態々賭けに出る必要は無い……あつても出すつもりは無いがな。他に質問はあるか？」

更に尋ねると、今度は雷が手を上げて質問してきた。

「提督っ！海域を移動中に他の艦娘にあつた場合は？私達つて、海で単艦で出てきちゃう場合も有るわよ」

「はぐれ艦娘の事か？可能ならばウチに引つ張つて来い、無理強いする必要は無いが、そういうった艦娘は基本保護するのが国の方針だ」

「引つ張つてきた艦娘はどうなるの？」

「ふむ、本人との面談後、本人の意思次第ではウチに所属、或いは他所に回される。また、本人が戦う事を望まない様ならば艀装解除後に一般人としての生活が出来るよう、連絡艇で本土に送られる。他にはあるか？ないな。では、出港準備後速やかに出撃してくれ」

≫ Sazanami view

「それじゃー、頑張ろうね雷！」

「まっかせなさい、わたしが付いてるんだから大丈夫よ！」

雷が自信ありげにそう言ってくれるのは、少し頼もしい。

「それよりも、提督のこと、どう思う?」

「ご主人様の事?」

はて、どう思うかと言われても…。

「なんだかんだで、まだ少ししかお話してないわけで…。でも、悪い人じゃあ無いんじゃない?」

「だといいんだけど。さ、早く行きましょ」

雷がひよいっと防波堤から海に飛び込む。

私も続いて海へと。

そういえば、普段は気にしないけど気になった事が一つ。

「けど、今更だけど不思議よね」

「なにが?」

「私達ってば、確かに軍艦だったけど…。今の姿で海の上に『立ってる』って絵面が」

「……言われてみるとそうだけど。まあ、私達艦娘なんだし、普通普通!」

雷は気にしない様子で鉄塊……碇を振り回す。

あれ、当たったら小破位は余裕でしそうだなー。

さて、それじゃあ……。

「駆逐艦漣、出る！」

機関の調子は良いようだし、これは良い感じにがんばれるかも！

≫ Admiral side

「ふむ、行つたか」

「はい。……提督、海軍司令部より長期目標の一つとしてメガフロートの拡張指示が出  
ています」

嫌な予感がする。

絶対面倒くさい指示だろう。

「どんな指示だ？ 詳細は？」

「詳しくは書面に書かれていますので、どうぞ」

ざっと目を通し、重要なところだけ要約すると。

「母港能力の拡張、建造用工廠と入渠用工廠の拡張、指定された種類の艦娘を揃える……  
か。どれも直ぐに出来る物ではないな」

「ええ、ですので海軍司令部からも長期で構わないとの通達が含まれて居ます。ですが、  
もう一つ、極秘任務……ありますよね？」

でかでかと「極秘」とスタンプが押された書類。



目を通すと馬鹿げているとしか考えられない作戦が記されていた。

「あるが……これ、本気か？ どう考えても『陸』の任務だろう？」

「ええ、だからこそ陸軍で最も作戦達成率の高い貴方が、このメガフロートの提督として選ばれたのです」

「……馬鹿げているな。最新鋭パワードスーツの稼動テストで、陸にあがつて巢を作った敵や、海上の深海凄艦の群れの中に突っ込めだど？」

「詳細は司令部との通信でどうぞ」

そうして訪れた通信室。

ここだけは他の施設と違い、かなり豪華だ。

小さいモニタと大きいモニタの二つがある。

外には衛星通信用の大型アンテナもあるので、どれだけ本気なのがわかってしまう。う。

色々と諦めて、覚悟を決めて通信を開くと、付いたのは小さいほうのモニタだ。

出てきた男性……襟章から元帥と思われる……に名乗り、敬礼する。

男は太って見えるが、その反面、目付きは異様に鋭く細い目は獲物を狙う蛇の様でもある。

『芝村元帥だ。敬礼と挨拶は不要だ。余計な時間を使うつもりは無い。要点だけ話せ』

のっけから色々飛ばしてるな、この元帥。  
というか、今思い出したぞ。

芝村元帥って言えば海軍きつてのヤリ手じゃないか！

陸軍にも大きなコネを持つ上に、日本の大企業の殆どにも顔が利く上に本人も相当な資産家！

『見た目と性癖はともかく奴が動けば必ず何かが変わる』と言われてるあの芝村か!!  
「わかりました。今回の『アーマードスーツ開発計画』ですが、本気ですか？」

『冗談に時間を使うつもりは無い。これが実現できないのならば人類は深海棲艦に敗れる可能性が増える、それだけだ』

「……わかりました。作戦概要の説明をお願いします」

『それは私の副官にさせよう……小鳥、任せるぞ』

そういうと、芝村元帥は通信画像から外れ、ヘッドセットをつけた女性が通信画像に映る。

『少佐、私は芝村元帥の秘書官の高梨小鳥大佐だ。今後、開発計画、最初の任務のミッションプランの説明は私が請け負う。では、早速だがミッションプランの説明だ』

説明が始まると、大きい方のモニタが点いて、色々な画像込みでの説明が始まる。

『メガフロートの南西10km地点にある小島に深海棲艦が棲みついたとの情報があ

る。元は小さな漁村ぐらいしかない小島だが。人が居るといふ事から奴等の餌場になつてしまつたのだろう。人工衛星からの映像によれば駆逐艦イ級8と軽巡洋艦ホ級3だ。作戦地点へはマルレが運転する高速連絡艇で向かう事になる。質問は？」

「生存者の扱いは？」

『生存は絶望的だろうが、もしも見つけたのならば救助しろしかし、優先度は高くない

……分かるな？』

「……了解しました。最善を尽くしましょう」

『他にはあるか？』

「……提督である私がこういった事をするのは彼女達に対する裏切りにも似た感情を覚えます」

『しかし、何時までも頼り切りではいられない。それに、海戦は彼女達の独壇場だが、陸戦においては彼女達は『艦艇である』という制約に縛られその実力の半分も發揮できない。しかし、深海棲艦共はどういうわけか陸上に上がると適応し、進化してしまう。こうなると陸上では別の対抗手段が必要なのだ。かつて開発したパワードスーツでもはや不足なのだ』

その言葉に少し疑問を覚える。

「パワードスーツで不足？私が以前朝鮮半島上陸作戦に参加した際はそんな感じはあり

ませんでしたか……」

ああ、と高梨大佐が頷き答える。

『内地に潜む深海棲艦……いや、陸上棲艦が進化したのだよ。例えるなら、軽巡から戦艦といえる位に』

「戦艦レベル？どんな恐竜的進化ですか、それはっ!？」

『だからこそ、新兵器の開発が必要なのだ。この案件は貴官一人ではなく、他にも幾人かの人間が請け負っているが、殆どが陸上戦闘のデータだ。貴官のように海上戦闘のケースが多いであろう人間は少ない。貴重なデータを期待するぞ。さて、長々と話しているワケにもいかんな。『小島奪還』作戦開始だ』

「……了解。これより『小島奪還』を開始します」

こうして俺の戦いもまた、始まった。

≡ S a z a n a m i v i e w

「ほいっかっかー！」

深海棲艦の駆逐ナントカ級の砲撃をかわし、相手の動きを見る。

意外とすばやいのねー。

「漣！素早いからどっちかが牽制して動きを止めて、トドメさしませよ！」

「あ、それいいですね。 んじゃ、私が牽制しますからイカちゃんがトドメで！」

私はそれだけ言って機関の出力を一気に上げて動きながら敵に牽制攻撃を仕掛ける。

「あ、ちよーなによイカちゃんって!?! あーもう、勝手に引っついて!!」

後ろで何か聞こえるけど、気にしない気にしない!

撃ち過ぎても後の戦いを考えると大変だから敵の的になって避ける事も考えなきやね。

「けど、避けるのもまた大変な、ワケ……キヤア!?!」

砲弾が側面を抉るように駆け抜けていく。

実際に煙突部分を抉ってみたいで、腰に衝撃が来てきつい!!

私に隙が出来たのを好機と見たか、敵駆逐級が大口を開ける。

口からは魚雷っぽい何か気味悪いのが吐き出される寸前だった。

「いつくわよ〜! ッター!!」

離れた位置、敵駆逐級の死角から12.7mm装砲の連射と魚雷が何本も敵駆逐級に当たると。

いわゆる会心の一撃って感じ? うん、私の危機を救ったのは本命のイカちゃんだった。

「ヒトの事言えた義理は無いけど、足が止まった駆逐艦ほど脆い物ってないわよねー」

「まあ、そうね……つと、それよりも漣、怪我とかは無い？」

イカちゃんがすいーつとこちらに近寄って様子を伺ってくる。

私は艦装内部の様子を妖精さんに尋ねてその返事を貰う。

「うーん、煙突が少し抉られて、衝撃で機関に軽いダメージ、かな？うん、小破には届かない程度！」

「そう？まあ漣がそういうんだつたら信じておくわ。けど、少しでも危なくなつたらわたしを頼りなさいよ？」

安心させてくれる笑みを浮かべながらイカちゃんがそういう。

か、かわいいいなあ！イカちゃんってば！

イカちゃんの笑顔だけでご飯（鉄鋼）が美味しく頂けちゃうよ！

ハ！コレがメシウマ！！

現代の人たちも中々奥の深い！！

とりあえず！

「うん、その時はヨロシクネ！イカちゃん！」

「い、イカちゃん言うなー！」

そんな風に騒ぎながらも弾薬や燃料の残りを相談し、私達は更に進撃する事を決めた。

この進撃が、後の運命を決定付けるものだとは、誰も思いやしなかった。

## 03：奇襲強襲は常套手段

||> Admiral view

身に纏ったアーマードスーツの試作品の着心地を確かめつつ、口を開く。

アーマードスーツやパワードスーツは、薄手のコンバットスーツの上に、背中に基礎骨格（ベースフレーム）、更に鎧となる胴体部分で前面と背面の防御を固め、脚部は基礎骨格に接続して装着者の脚を外側から覆うように固定され、腕部も同様に基礎骨格に接続し、こちらは腕に覆うのではなく機械腕として独立稼動して射撃や姿勢制御サポート、或いはマニュアル操作で格闘も出来る。

最後に頭部は防御能力もそうだが、複合カメラ機能と通信機能、水中行動の為の酸素供給が30分は可能、後は意味も無く『ブント』と光るカメラアイ機能。

おい、技術班、お前から遊びいれすぎだろう……不覚にもかっこいいと思ってしまうけど。

基本的には前面装甲が厚めで、多少前のめりになる様に見えるが、背面に可動式ブースターユニット2基があり、これで前、と左右への高速移動、更に跳躍補助も出来る。



……飛行は不可能で、その理由は単純にブースターユニットの能力に対して重量オーバーだからだそう。

更に、武装ハンガーラックも兼ねており、アーマードスーツ用のロケットランチャー、近接防衛用大刀がハンガーに装着されており、今回手に持っているのは大型ライフル。

一応、余裕で戦車装甲もぶち抜ける代物で有効射程は1300mとある。

「これ、本当に大分変わったんだな」

ちなみに、以前俺が陸軍に居た時に開発されたスーツは、コンバットスーツを鎧武者っぽくした装甲とその重量をカバーする為の動作補助、重火力で撃つ方が怯まない為の姿勢制御機能程度のスーツだ。

これだけでも凄イと思つてたんだけど、今回ははより『ハイスピードロボットアクションゲームに出てきそう』な見た目だった。

『水上と陸上をホバー移動したい、という誰かさんの意見を採用させてもらった。幸いにも近年の技術の発展度合いは良い感じだな。ホバークラフトの発展系の技術となるよ、それは』

あ、それ俺だ。

以前浅瀬移動する時に、パワードスーツだと移動が面倒だったんだよ……転んだりした時、水攻め状態で。

後、基本歩兵と同じで移動は歩行だった。

だが、幾ら補助があると言っても全身に鎧を纏つての歩行は稼動範囲が狭い上に負荷からくるちよつとしたストレスで、戦闘が長引くほどに正直やつてられるか、と言うのが多い。

だから、脚部に付けられたその機能は単純にありがたい。

「なるほど。大佐、注意点は？」

『ホバーを使用した移動中は跳躍が困難な上に、段差の移動が面倒くさいものとなる。適宜ホバーと歩行モードを切り替えると良いだろう』

「なるほど。水上で転覆した場合はどうなる？」

一番怖いのがこれだ。

水中で身動きできません、は海のご真ん中で戦う海軍としてはイコールで死だ。

『その時は姿勢制御やその他諸々の機能で浮上した上で再度立ち上がる事が出来るが、その辺りの基本は自動操縦だ。転覆すれば大きな隙を作るといふ事を意識しろ』

「これで基本速度が陸上時速70kmで水上が38ノットか……水上の方が遅いのは何故？」

基本的なことだが、一番気になるところ。

歩兵の基本は機動力！イカに早く展開できるかがかぎとなる。

『簡単だ、水上でのバランス維持にや安全の為に出力制御を自動で行うから陸上ほどの速度をだせないのだ。だが、水上移動速度は艦娘最速の駆逐艦、島風にやや劣る程度だ。十分な速度だといえよう。それに運動性能も十分高い。後は貴様の腕次第だ……そろそろ作戦領域だな』

確かに、言われてみるとそうか。

『洋上からの強襲実戦でのテストは今回が初だ。貴様の戦果とデータを期待するぞ』

「了解。出撃する！」

輸送艦から飛び出し、ホバーとブースターを同時に稼動。

俺は一直線に深海棲艦の巢へと殴りこみをかけた。

何キロもありそうだった小島はあっという間にその姿が大きくなり、そこに屯する深海棲艦と、犠牲者の姿が見える。

「攻撃目標を発見、駆逐する！」

手近に見える敵深海棲艦たちに、早速ライフルとロケットランチャーを乱射し奇襲を仕掛ける。

|| > S a z a n a m i v i e w

今、私達はあのぐるぐる廻った羅針盤に不安を抱きつつも、任務を全うすべく進んだ……は良いんだけど。

見事に今居る場所が何処なのかいまいち分からなかった。

「うーん、本当にこつちで大丈夫？」

「けど、今気にしてもしょうがない！ある程度見回ったら来た方向を戻れば良いのよ」

イカちゃん、ポジティブだなあ。

まあ、言う事ももつともだし、頑張りますかあ。

そう思っていた所で、聞き覚えのある唐突に風切り音。

直後、私とイカちゃんの手前10メートル地点に着弾。

強烈な飛沫が全身を濡らす。

「敵砲雷撃っ!!」

「どこから!?!」

後ろからの砲撃は無いだろう、つまり前方か左右のどちらかの方向から。

波の音にかすかに紛れる異音…。

「漣ッ、挟撃よ左右から来るわ!!」

「右は駆逐2!!」

「左は軽巡1、駆逐1!!」

気付けば自然と背中合わせに立ってる。

この状況がまずい事は理解できる。

打開策としては、逃走だけど、今すぐ逃げても後ろから集中砲火を受けしつこく追いかけられる。

相手が駆逐、軽巡なのだから、速力は互角と見ても良いかもしれないけど、数はこちらの倍……。

更に、下手に逃げれば追っ手は増える可能性もある。

「……雷ちゃん、距離を保ちつつ一戦交えて、夜の闇に紛れて戦線離脱、良いよね？」  
「わかったわ。折角着任したのに、初日で轟沈とか、考えたくも無いもの。念の為に、持たされてた救難信号を無線機で流してるけど……何処まで頼れたものか」  
私達に唯一ツキがあるとすれば、それはきつと今が夕刻ということだ。

後、1時間もしない内に夜の闇が私達を覆い隠してくれる。

夜闇にさえ紛れられれば、後は救難信号を待つだけで大丈夫、そのはず。  
覚悟を決めて私達は砲撃戦に移った。

「漣の本気、見せてあげる！」

「つてー！」

元より数で劣る戦い、けれど相手は本能だけで戦う深海棲艦の駆逐艦と本の僅かばかりの理性しか持たない軽巡洋艦。

ならば、戦い様はある筈よね！

「イカちゃん、後退しつつ牽制砲撃！余裕があったら敵駆逐艦を沈めましょ！」

「つて、またイカちゃん扱い?! あーもう! とにかく分かったわ。後、互いに少し距離をとって回避行動しやすくするわよ!」

連装砲、1番2番、撃てッ!

——1番2番撃ちました。

——ハズレです。直撃無しですが僅かに相手に打撃を与えた模様。

続けて、左右両脚の1番2番連装魚雷順次発射!

——左右両脚の魚雷、1番2番、発射しました!

——右1番2番、左1番全弾ハズレ! 左2番が2発敵深海棲艦駆逐口級に命中!

しかし撃沈ならず! 中破程度!!

妖精さん達との声なき会話で指示と報告が行きかう。

その合間にも、少し離れた位置にいるイカちゃんと鎮守府から支給された無線機で通話している。

「あー……:そういうえば、私達が艦艇だった時つてえ、接触、衝突事故で事故つて大破したり轟沈した子も居たわよねえ」

イカちゃんの方に軽巡ホ級と駆逐ハ級。

あちらは軽巡もあるせいか、駆逐だけよりも弾幕が厚いが、イカちゃんも相手への牽

制と回避に専念している為に直撃は今の所無い。

「……それ、電には絶対言わないでね？」

「わかってるわよ。デンちゃんには言わないから……ってあぶな?!」

拙い、読み間違えたかもッ!

深海棲艦つてば、ダメージ受けたせいで余計好戦的になつてる!

「ちよつと漣。あいつら怯むどころか、気にせず突っ込んでるわよ?!」

「こ、こいつぁー拙いかも、ですなぁ」

||> Admiral view

奇襲に成功し、4体の敵駆逐級と1体の軽巡級を初手で葬った。

この影響であろうか、敵深海棲艦は浮き足立つて見える。

「ホバー、小刻みにブーストッ!距離を詰めて……斬る!!」

言葉にすれば簡単だが、高速で飛来する砲弾を避けつつ、実行するのは中々に難儀だ。だが、アーマードスーツの性能はそれを可能にした。

気のせいでなければ、1秒の体感時間と実際の時間の感覚がずれてる、良い意味でだ。詰まる所、思考速度の加速による反射の上昇とでも思えば良いのだろう。

お陰で『撃たれてから避けるの簡単でした』と言えるレベルだ。

いや、強がり言った。だが、撃たれたのを察知してからでも対処する事が出来るレベルだ。

さて、避けて、距離詰めて、避けて、大きく振りかぶって上段からの袈裟切り。返す刃で接近してきたもう一体の駆逐級を斬り伏せる。

今更だが斬ると言うよりは斬り潰すが正しい、等と思考をそらしつつも即座に回避機動を取りながら次の獲物を見定める。

開幕で盛大に弾を使ったので、近接戦闘で仕留めたい所だが相手は奇襲強襲と続けたせいで深海棲艦が警戒して接近が困難になる。

しかしそれでも駆逐イ、口、ハ級をそれぞれ誤射すらも誘導し倒すのは存外苦労はしなかった。

浅瀬、や陸上だから、と言うのもあるだろうが、それ以上にスーツの性能が思ったよりも高く、こちらの理想道理に動く。

とはいえ、Gの負担はその性能に比例して高くなるので、疲労も一気に溜まる。

「コイツを纏った状態で長時間の戦闘は無理だな。負担が多過ぎる。一度の出撃でよくて30分から1時間程度の任務で装着者は限界って所だろう」

『なるほど、その辺りは他の装着者の意見と同じですね』

回避を続けているが、罅が明かないと判断して斃したばかりの深海棲艦を持ち上げ盾



にする。

本来、深海棲艦が一番小さな駆逐級であつても大抵が相当重い。

だから以前のパウードスーツでは盾として持ち上げる程度は出来たがそれ以上は出来なかつた。

だが、アーマードスーツの出力はそれ以上を可能にした。

「防いで終わりつて思ったか？ 残念！ 投げるんだよお!!」

「!!」

駆逐イ級を投げ飛ばし、それを打ち落とそうとする軽巡ホ級の一体。

他のも突飛な行動に驚いて一瞬だが注目が駆逐イ級の残骸に集まる。

その間に、ライフルとロケットを再度装備し順に一斉射撃でホ級を潰そうと企むが、一体だけ潰せて、もう一体は我に帰つたお陰で再び弾幕。

イ級を投げつけられたホ級は当たり所が悪かつたのか大爆発してそのまま果てた。

そういうや、イ級は腐つても駆逐艦だ。

積んでた魚雷が爆発したんだろうな。

「ホオオオ!!」

「これならゲームの弾幕回避の方が難しい位だ!」

最後は機動性で翻弄しつつ一気に距離を詰めて大刀で切るだけの簡単なお仕事だつ

た。

『ふむ、今回の任務は完了だ。試作機の実践テストとしては上々の結果だ。高速連絡艇に乗って帰還しろ』

「了解。これより帰還する」

しかし、アーマードスーツの性能は凄いな。

パワードスーツだったら、確実に俺の方がミンチになってたよ。

「で、これは輸送艇に戻ったら脱いでも良いのか?」

『ええ、問題はあ……失礼。脱ぐのは後回しだ。再出撃の準備を。予備の弾薬があるから早急に補給を済ませろ。これより、近海で追い詰められている友軍の援護に向かう』  
「なに?……仕方あるまい」

||>Sazanam i View

撤退戦をする、と言うのはやっぱり苦しい。

ましてや、状況が次第に悪化してきているとなれば余計にだ。

—機関出力低下!

—以前に受けた衝撃によるダメージが影響してます!

うそ!以前って言う……煙突に当たったあれ!?

「漣、脚が鈍っているわよ!」

「ご、ごめんイカちゃん。先に行つて!」

こうなれば、漣も覚悟を決めるしかない。

「ちよ、ちよつと何を言つてるの!」

「実は、漣の機関部にちよつと異常が出ちゃつてまして。まあー残念ながら落伍という事になつちやいます」

「だ、ダメよ!!漣を失うわけには行かないわ!!」

直後、砲撃。

敵が追いついてきたのだ。

「助けるわ!」

そう言つてイカちゃんが漣の前に出て防御装甲を構える。

本来は魚雷への被弾による暴発を防ぐ為の装甲だけど、こういう使い方もあるのか、と少し感心しつつ艦装内部の妖精に攻撃可能武装と応急修理の有無を問い合わせる。

——連装砲、まだうてます!けど残弾少数!

——こちら機関室。これ以上の修理は現状不可能です!寧ろ、何時駄目になつてもおかしくないよ!

「ツたー…思つたより痺れるわね」

「イカちゃん…思つたより無茶するね」

「なによもう、雷は大丈夫なんだからー!」

若干涙目で強がりと言ってるけど、取り敢えずまだ大丈夫そう。

けど、現状はより悪化しつつある。

『こちら、メガフロート『阿夫利（あふり）』鎮守府所属の提督だ。これより、そちらを攻撃する敵勢力の殲滅行動に移る』

メガフロート『阿夫利』。

間違いなく、漣たちが鎮守府にしている人工島の名前だ。

命名は提督が着任前に行ったんだときいたつけ。

確か、地元が神奈川の大山（別名：阿夫利山）の麓にある町だって聞いたけど。

そして、その提督となると、今の通信の相手が誰かと言うのも直ぐに答えが分かる。

「この声、もしかしてご主人様?」

「え?! 何でウチの提督が?!」

そうして暫くもしない内に、バーナー音を響かせながら、白黒の鋼鉄の塊が砲弾をばら撒きながら戦線に加わった。

そして、漣たちの前に壁になるように立つ。

『……敵駆逐艦2、撃破を確認!』

『こちらでも確認した。残るは軽巡と駆逐が1ずつ。余り時間をかけるなよ? こちらま

で攻撃されては、対処が出来ん』

『了解。これより敵勢力を殲滅する』

「あの、ご主人様……ですか？」

「ああ。だが、話は後だ。お前たちは俺が敵を引き付ける間に後方の連絡艇に退避。なに、あの程度なら以前戦った飛行場姫と比べれば楽勝だ」

そう言つてご主人様は身に纏つた鋼の翼で火炎を噴かせて一直線に深海棲艦の元に向かつていった。

「あれが、私……達の提督なのね」

「そうね……つてうん？」

イカちゃん、貴女よく見るとなんだか顔が赤い上にポーつとしてなんか様子がおかしいけど、もしかしてもしかした？

—サザナミⅡサン、イカヅチⅡサンから例のアレな匂いを感じますです！

—艦橋のヨウセイⅡサン、例のアレとはもしかしなくても例のアレでしょうか。

その後、暫くしない内に提督は私達が苦戦した敵を実にあっさり、被弾無しで倒してしまつたが、その後連絡艇に戻つてくるとそのままダウンして翌朝まで起きてこなかつた。

その事を通信で提督の上官らしき太った男のヒトに伝えると。

『ふむ、奴に送った装備は奴の戦術特性に合わせてあるとはいえ、やはり肉体への負荷が大きいか。奴には有事と演習以外では使用を禁ずると伝えておけ』

と言われた。

話を聞くに、元々試作装備であつた上にそもそも負担が大きいらしいパワードスーツの発展型。

更にそれよりも負荷が大きくなる水陸両用高機動装備と言うものらしくて体への負担がとんでもなく大きいらしい。

詰まり、今回みたいに助けられる事はそう何度も無いだろう、と言うことだ。

「ご主人様。漣はもうご主人様にご迷惑をおかけしない用に、無理しない程度に頑張りますね！」

「雷もなんだから！もう前みたいにはならないんだから！……だからもーつと私に頼つていいのよ！」

漣もイカちゃんも、提督に無理してもらわないで済む様に頑張ります！